

勝田副長の指揮で、飛行機からはずした十三三三(リ)機銃(や機関銃)で、ならべておいた燃料用ドラム缶を一齐に撃った。ガソリンに火がついて瞬間に引火、途端にあたり一面真昼のようにあかるくなつた。敵の姿がまるみえになり、それを目撃してにちから銃撃をくわえた。上陸できないとみた敵は退却していった。

このときの反撃は成功し敵に大きな打撃をあたえた。日本軍の抵抗力を強く米軍に印象づけたようだった。

## 暗黒の壕の中で

翌朝、八月八日、ラバウルから味方の一式陸攻の編隊が飛んできて敵艦隊を雷撃した。魚雷のあたつた艦上で、白い制服の敵兵が右往左往している姿をわれわれは肉眼で見えていた。敵艦艇が十一隻ぐらい沈んでいくのを数えて、一人が本部のある大きな壕へ報告に出た。が、それっきり彼は戻ってこなかった。

このあと敵は機上からの爆撃、つづいて艦砲射撃、また爆撃といわゆる波状攻撃をしかけてきた。十時ごろがいちばん激しく、宮川と壕の中へ避難していたが、そのとき至近弾をくらった。

壕の入り口前には土囊(どのお)とついで爆風よけに土の山を盛つてあつたが、その土が崩れて穴の入り口を埋め、蓋をされたようになつて外へ出られなくなつた。二人は爆風にぶつ飛ばされ気絶した。

それからどのへらいたつたのかわからない。

とにかく、壕内は真暗。なすすべがない。

あれだけ耳が干切れんばかりに轟いていた爆弾や砲撃の音がまったく聞こえなくなつてゐる。

『ああ、おれもいよいよ地獄の底へ落ちてゆくんだな』

と観念した。

しかししばらくして眼が慣れてくると六十キロの不発弾直径二十センチ×長さ八十五センチ（九十センチ）がそばにつき刺さっていて、天井には不発弾がつき抜けた穴がいくつかある。穴には椰子の葉がかぶさり、そこからのかすかな明かりで、宮川の姿がぼんやりと見えた。

耳をすましても結局この防空壕からは敵の砲撃も、別の壕にいる仲間の敵に向かう突っ込む喚声も、なにも聞こえず、ウンのように静かだった。なにかことが起これば、天井の穴から這い出ても、仲間と行動をとる気だったので、外界の物音に耳をそばだてていたが、いつまでたってもなんの物音もなかった。

仲間は、われわれが意識を失っている間に捕らえられたか、全員戦死してしまって、われわれ二人だけが生き残ってしまったのかもしれない、と思った。

あるいは砲撃が終わって、いよいよ敵が上陸してくる頃なのかもしれない、とそう思うても、盲目状況がわからず、これからわれわれはどうすべきなのか、判断しかねていた。

しかし、日本軍はいままで一度も負けたことがない軍隊、一時的には攻め込まれてもまだラバウルもショートランドの基地もある。すぐその基地から反撃に出て、きつこの島を奪還してくるにちがいない。早ければ二三日、遅くても一週間と宮川がいつのを聞いて、私も同じ考えだったので、早く援軍が来るのを心待ちにした。

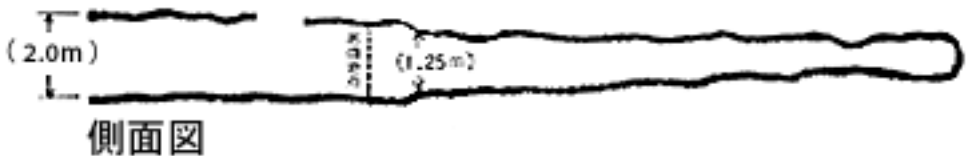
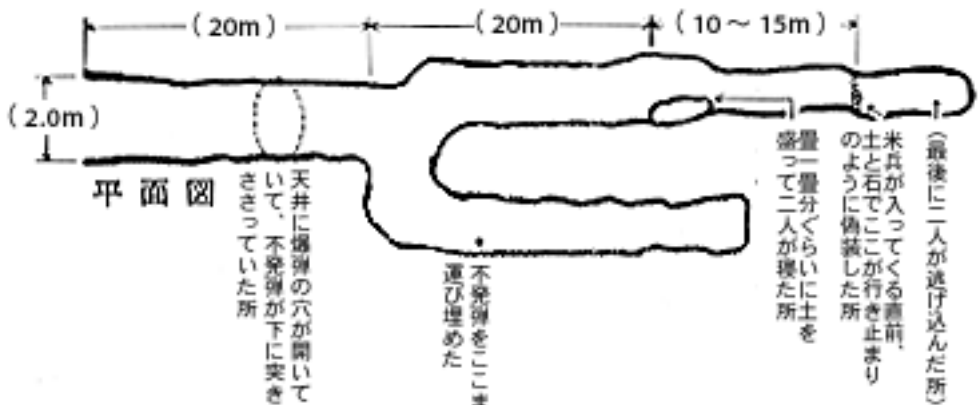
こんな異常事態でありながら、不思議と切迫感にさいなまれせず、悲観的にもならず、たとえ泥水をすすっても生きていさえすればなんとかなる、と信じていた。

自分たちが生きているのを自覚しはじめると、こんどは急に空腹感がおそってきた。なにしろ、六日の夕食を食べたきりで丸一日、なにも食べていないのだ。爆撃に避難したかと思うと、こんどは急に火事場のばか力を出し、二百リッター入りのドラム缶を何本も「ロロロ」がしたりしたのだから。

この壕は、六七人を入れる壕で、士官が緊急避難に使う所だった。私は士官の命令で、食糧をこの壕へ運びこんだことがあったから、この壕のことは宮川よりよく知っていた。入口が二つで幅二メートル、高さ二メートル、奥は二十メートルくらい入ると二手に分かれて、わざと曲げてつくってあった。

防空壕がますますのままで、爆撃されたときのものすごい爆風がまともにあたって人

# 記憶による小型の防空壕内見取り図



間は叩き付けられたり、奥まで吹き飛ばされて死傷してしまうので用をなさない。

ついでに説明しておく、爆撃されたときの防御する姿勢は、両手とも四本のゆびで両眼をおさえ、親指は両耳穴をふさぎ、口は開けたままにして地べたに体をながくして伏せるのがよい。そうしないと、眼球が飛び出たり、内臓が破裂することがある。

## 不発弾処理

腹が減ってへトへトになりながら、二人を悩ましたのは、いつ爆発するかわからない不気味な不発弾の処理だった。

最初、これらの不発弾は二人とも話に聞いていた時限爆弾ではないかと思っただけ。しかし時計の「チ」「チ」という音もいない、爆弾を扱ったことがあるので、不発弾の矢羽の下に付いている風車を、壕にたまたまあった針金で信管にふれないようにしりとり縛った。それから大胆になって埋まっている弾の周囲の土を手でほじくったり、左右に爆弾を揺すって、周りの穴を大きくして引き抜いた。もしも爆発したときのために遠ざけておこうと、向こう側の穴へゆっくり運んだ。運び終えたあとは、二人ともぐったりしてしばらく口もきけなかった。